

翅裏の波状模様で特徴づけられるウラナミジャノメの仲間は、ヒメウラナミジャノメが種子島よりも南の地域を除く日本全国に普通に見られ、その他の4種：ウラナミジャノメ、リュウキュウウラナミジャノメ、マサキウラナミジャノメ、ヤエヤマウラナミジャノメはその産地分布に限られる。その中で、マサキウラナミジャノメは石垣島と西表島の固有種だが個体数は多く、両島においてはごく普通種となっている。

マサキウラナミジャノメとリュウキュウウラナミジャノメは裏面の波状白模様が色濃くてよく似ているが、幸い、後者は沖縄本島より南には分布しなく、逆にマサキウラナミジャノメは石垣島より北には産しないので、それぞれの同定を間違える心配はない。

筆者は1993年に初めて沖縄名護地区と石垣島を訪れたのだが、そのときに本種を目にした記憶はなく、1995年11月3日に西表島仲間川林道への入り口となる地点の路傍草むらで初の出会いを果たしている。発生時期であれば、路傍のあちこちでその姿をみることができ、2007年11月の石垣島屋良部地区では、シロノセンダングサで吸蜜する新鮮個体のビデオ撮影を楽しめた。



以下、紀行文の関連記述を一部改変して転載。

1995年11月3日。二度目の西表島は大原港から入って仲間川林道を探索する。下手なハンドル操作をすると自転車のタイヤがさけても不思議ではないほどに角の鋭い石が多いガンガラ道をブレーキ駆使で進む。ますます林道らしくなってきた下り坂の両サイドで叢の間を縫うようにヒョイヒョイと飛び交うのは羽裏の白い縞模様がきれいなマサキウラナミジャノメ。

1999年9月18日。例年になく気温の高い期間が長く雨も少なかったせいだろうか、大富林道深く入り込んだ時点でもあいかわらずチョウの姿が少ない。それでも石垣島に多かったヤエヤマムラサキがここでも多く発生しており、竹富島とはちがって昨年と全く同じオオイワガネに若令幼虫の群れが見つかる。マサキウラナミジャノメが路傍の叢をぬうように飛ぶ。スジグロカバマダラやツمامラサキマダラがあまりに少ない。

2007年11月5日。数百メートル上った屋良部林道沿いにハマセンダンの花があり、無数のチョウが求蜜活動を展開している。ナミエシロチョウやヤエヤマカラスアゲハ、スジグロカバマダラ、ツمامラサキマダラ、アサギマダラ、リュウキュウアサギマダラ、オオゴマダラ、キチョウ、マサキウラナミジャノメ、コウトウシロシタセセリなどが同定できる。ヤエヤマカラスアゲハはボロが多い。路傍のシロノセンダングサなどいたるところに新鮮なマサキウラナミジャノメが飛び遊ぶ。